

10章 近世V

問題

【1】

解答

問1 4 問2 1 問3 3 問4 2 問5 5 問6 4 問7 1
問8 3 問9 2 問10 1 問11 4 問12 5 問13 2 問14 4

解説

大航海時代以来の世界経済の覇権争いをテーマとしている。問1・問8の地理的な問題や問10の正誤判定問題など、やや難問も含まれているがその他は基本的な問題。この問題文を利用してヨーロッパ諸国の経済的覇権の変遷を把握してもらいたい。

問1 5のリスボンはポルトガルの首都。1のバルセロナ、3のバレンシアは地中海沿岸の都市。2のバリヤドリードはスペイン北西部のコロンブスの没した地。4のセビリヤはスペイン南部、グアダルキビル川河口から約80kmにある港市。イスラーム支配下で重要な商業都市となり、12世紀にはムワッヒド朝の首都も置かれた。1248年にカステイリヤが占領し、15世紀末から16世紀にかけて新大陸貿易で繁栄した。必ず地図で確認すること。

問2 オスマン帝国のキプロス島攻略に対し、スペイン・ヴェネツィア・ローマ教皇・ヨハネ騎士団の連合艦隊がオスマン帝国の艦隊を破り、スレイマン1世（位1520～66）によるプレヴェザの海戦（1538）以来の地中海におけるオスマン帝国の脅威が一時的に緩和した。

問3 フェリペ2世は1580年のポルトガル王家の断絶に際して王位継承権を主張してこれを武力併合した。以後1640年までスペイン王はポルトガル王を兼任し、広大な植民地をも含めポルトガルを支配した。

問4 答は明らかなので選択肢の人物を解説しておこう。1のコルテスはスペイン人でアステカ帝国の首都テノチティランに進撃し、メキシコを征服した（1521）。3のバルボアはスペイン人でパナマ地峡を横断して太平洋に到達した（1513）。彼の部下がインカ帝国を滅ぼしたピサロ。4のラス＝カサスはスペイン人のドミニコ系修道士で、征服者に統治を委ね、先住民のキリスト教化の代償として強制労働を認めるエンコミエンダ制（16～17世紀）を『インディアスの破壊についての簡潔な報告』で批判した。5のアメリゴ＝ヴェスプッチはフィレンツェ人で数回の探検航海でアメリカがインドではなく「新大陸」であることを報告した。のちにヴァルトゼーミュラーが新大陸をアメリカに因んでアメリカと呼んだ。

問5 答は明白なので他の地名を説明しておこう。1のテノチティランはアステカ帝国の都でテスココ湖の島。2のテオティワカンはメキシコ盆地北東部にあった都市で、太陽のピラミッドなどの大規模な石造建築物で有名。3のクスコはインカ帝国の都。4のティアワナコはアンデス文明の1つで1～12世紀に栄えた。アンデス文明は前1000年頃のチャビン文明に始まり、巨大な地上絵で有名なナスカ文明（1～8世紀）、チムー帝国（12～15世紀）、インカ帝国などがある。

問6 フランドル地方の都市としては2のブリュージュ、4のアントウェルペン、5のブリュッセルがあるが、15世紀以降繁栄の中心はブリュージュからアントウェルペン（アントワープ）に移った。アントウェルペンは、15世紀後半以降中継貿易・金融業でヨーロッパで最も繁栄を誇ったが、1568年からのオランダ独立戦争中にスペインの攻撃を受け、1585年にスペイン軍に占領されて荒廃した。

問7 南部10州（現在のベルギー）はスペインの懷柔策によって独立戦争から脱落したが、北部7州（現在のオランダ）は1579年にユトレヒト同盟を結成してスペインの圧政に反対し、信教の自由獲得までの団結を誓った。ネーデルラント連邦共和国としての独立宣言は1581年。1609年の休戦条約で事実上の独立、国際的承認は1648年のウェストファリア条約においてである。

問8 3のハンブルクはバルト海ではなく北海の港市。エルベ川河口の港市で北海公易とハンザ同盟の中心。

1のペテルブルクはピョートル1世（位1682～1725）がスウェーデンとの北方戦争（1700～21）でバルト海沿岸に領土を拡大し、ネヴァ川河口に“西欧への窓”として建設を開始し（1703）、1712年にモスクワから遷都した。2のダンチヒ（ダンツィヒ）は現在のグダニスク。10世紀に建設され、12世紀にはポーランド領となった。13～14世紀にはハンザ同盟の一員として栄えるが、18世紀のポーランド分割でプロイセン領となった。第一次世界大戦後はヴェルサイユ条約によって、国際連盟管理下で自由市とされポーランドが海港の使用権をえたが、ドイツが割譲を求めて第二次世界大戦の誘因となった。4のキールについては、第一次世界大戦末期にドイツ政府が交渉を有利に展開する目的でキール軍港内の艦隊に出撃命令を出したが、水兵がこれに反乱を起こしたことがドイツ革命の契機となった。5のリューベックは12世紀に東方植民の中心都市としてザクセン公が建設したバルト海沿岸の港市。バルト海・北海交易の中心となりハンザ同盟の盟主となった。いずれの都市も必ず地図で確認しておくこと。

問9 ジャワ島のバタヴィアにオランダ総督府が建設され、東インド経営の拠点となった。

問10 カザリンはフェリペ2世ではなくフェリペ2世の父カルロス1世（神聖ローマ皇帝カル5世）の叔母に当たる。

問11 イギリスは、イギリス東インド会社について、1813年にインド貿易独占権を廃止して、1833年に商業活動を停止し、1858年に解散した。解散の原因はシパーイーの反乱（1857～59）である。

問12 護民官は古代ローマで設置された役職。クロムウェルが就任したのは政治・軍事の最高官職である護国卿。クロムウェルは武力で長期議会を解散し、統治章典に基づき終身の護国卿に就任した（1653）。

問13 ルイ13世（位1610～43）の宰相リシュリュー（任1624～42）は三部会の召集を停止し（1615年の解散以降開催せず）、貴族・ユグノーを抑圧した。三十年戦争（1618～48）では旧教国でありながら反ハプスブルク政策により、新教国スウェーデンと同盟し参戦した。アカデミー＝フランセーズ（フランス学士院）を創設（1635）したことでも覚えておこう。

ルイ14世（位1643～1715）の宰相マザラン（任1642～61）はウェストファリア条約（1648）でアルザスとロレーヌの一部を獲得した。王権強化に反対する高等法院（王令の審査機関）と貴族の反乱であるフロンドの乱（1648～53）を鎮圧した。また、ピレネー条約

(1659) でスペイン王女をルイ 14 世の妃とし、スペインより若干の領土を獲得した。

ルイ 14 世の財務長官コルベール（任1665～72）は重商主義政策を推進し、王立マニュファクチュアを設立して輸出向けの毛織物（ゴブラン織）を製造した。東インド会社を再建（1664）してインドでポンディシェリ・シャンデルナゴルを獲得したほか、新大陸では西インド会社を設立した（1664）。重商主義を推進したのは財務総監のコルベールであって宰相のマザランではない。

問14 ルイ 14 世は母・妻がハプスブルク家の出身であることを利用しつつ、反ハプスブルク政策を展開した。ピレネー山脈からライン川までをフランス固有の領土とする自然国境説を唱え、以下のような侵略戦争を推進した。戦争名と対戦国、および発生の順序を必ずすべて押さえておくこと。

- ①南ネーデルラント継承戦争（1667～68）…スペイン領ネーデルラントの継承権をめぐる争い。イギリス・オランダなどに阻止される。
- ②オランダ侵略戦争（1672～78）…南ネーデルラント継承戦争におけるオランダの妨害に対する復讐戦。ナイメーヘンの和約（1678～79）でフランスは若干の領土を獲得。
- ③ファルツ継承戦争（1688～97）…ドイツのファルツ選定候領の王妃の継承権を主張して勃発。神聖ローマ皇帝とオランダ・スペイン・ドイツ諸侯などがアウクスブルク同盟を結成し、イギリスなどとともにフランスに対抗した。講和条約であるライスワイク条約（1697）にてフランスが大幅譲歩した。新大陸ではウイリアム王戦争が勃発し、第2次英仏百年戦争が始まった。
- ④スペイン継承戦争（1701～13）…新大陸ではアン女王戦争が勃発した。スペイン王カルロス2世（位1665～1700）の死でスペイン＝ハプスブルク家が断絶すると、ルイ14世の孫フェリペ5世がスペイン王に即位（1700）、これに列国が反対し開戦した（フランス・スペイン対オーストリア・イギリス・オランダなど）。ユトレヒト条約（1713）でフランスとスペインが合邦しないことを条件に、フェリペ5世（位1700～24、24～46）の即位が承認され、スペイン＝ブルボン朝が成立した。

その後も、ルイ15世（位1715～74）がオーストリア継承戦争（1740～48、新大陸ではジョージ王戦争）・七年戦争（1756～63、新大陸ではフレンチ＝インディアン戦争）に参戦し財政を悪化させた。

【2】

解答

a (28) b (34) c (25) d (7) e (3) f (6) g (35) h (23)
i (32) j (8) k (19) l (9) m (13) n (17) o (14)

解説

新大陸に関するヨーロッパ諸国の植民に関する問題。基本的なものが多い。各国の領域を地図できちんと押さえておくこと。

a 「スペイン、ポルトガルの植民地独占の転換点」となり、「オランダ、イギリス、フランスの新大陸への進出が始まる」という部分から、ここで問われている1588年の海戦の結果、

スペインが敗れた、という事実が分かるだろう。これはスペイン（フェリペ2世）をイギリス（エリザベス1世）が破ったアルマダ海戦をさしている。

b 「植民地建設を企てたが失敗」という部分からウォルター＝ローリーが正解となる。問題文には「イギリスの歴史家であり詩人でもある」と書かれているが、一般的にはイギリスの軍人、探検家という肩書がつけられている。彼はエリザベス1世の寵愛を受けて近衛隊長となり、ヴァージニア植民地の建設を企てたが失敗し（1584～85）、やがて寵を失って投獄された。女王の死後も波瀾万丈の人生を送っている。

c～e ウォルター＝ローリーが失敗したヴァージニア植民が本格化するのは、ジョン＝スミスが1607年にジェームズタウンを建設して以後のことである。ヴァージニアの名は処女王エリザベス1世に因るものであるが、ジェームズタウンはジェームズ1世に因む命名である。間違えないように。

f やや難。最初の植民地議会は1619年にヴァージニアで行われた。これはイギリス議会政治の伝に基づくものである。

g ジェームズタウンを中心とするヴァージニア植民地、ピルグリム＝ファーザーズが建設したプリマスなど、現在のアメリカ合衆国東北海岸部一帯はニューイングランドと呼ばれた。

h タウン＝ミーティングは主にニューイングランドで行われた自治制度で、植民地議会が住民の代表で構成されていたのに対し、こちらは全有権者参加の直接民主制であった。

i・j マンハッタン島に築かれた都市、現在のニューヨークに関する問題である。オランダによってこの地はニューアムステルダムと名づけられ、植民地ニューネザーランドの中心地として繁栄した。

k・l ルイジアナの名称は太陽王ルイ14世に因るものであるが、この問題ではルイという名を持つ王が他にはいないので、間違えることはないだろう。

m～o 第2次英仏百年戦争について整理すると、ファルツ継承戦争（1688～97）の際に北米で展開したウィリアム王戦争（1689～97）、スペイン継承戦争（1701～13）の際に北米で展開したアン女王戦争（1702～13）、オーストリア継承戦争（1740～48）の際に北米で展開したジョージ王戦争（1744～48）、七年戦争（1756～63）の際に北米で展開したフレンチ＝インディアン戦争（1755～63）となる。1763年のパリ条約の結果、フランスは北米におけるすべての植民地を失い、イギリスとの覇権争いに敗れた。

【3】

解答

あ ジェントリ（郷紳）　　い 王権神授説　　う 権利の請願　　え 重商主義

お 航海法　　か 審査法　　き 人身保護法　　く トーリ（党）　　け ホイッグ（党）

こ 権利の宣言

解説

17世紀のイギリスで起こった市民革命の流れをテーマとした問題。問題文が歴史の流れをつかめるように工夫されている良文であり、なおかつ問われている内容はどれも基本的なものなので、しっかりと文章を読み、誤ったところは復習しておこう。

あ 問われているのは「貴族と農民の中間的な地位を占める地主階級」に相当する歴史用語であるから、ジェントリ（郷紳）が正解となる。ジェントリより一級下に位置する独立自営農民（ヨーマン）と間違えないように注意しよう。

い ここで問われているある「立場」に基づいて、ジェームズ1世は「議会と新しい市民層を軽視し」「少数の大商人に、各種の商工業についての独占権を与え」「ピューリタンを弾圧」するなどの專制政治を行ったのである。王の專制政治を正当化する「立場」といえば、王権神授説を思い出すことができるだろう。

う チャールズ1世の時代に議会が王に提出したのは「権利の請願」である。字面だけ見るとのちの名譽革命時の「権利の宣言」および「権利の章典」と混同しやすいが、「権利の請願」と「権利の宣言」「権利の章典」ではその背景も大きく異なるので、しっかりと理解しておくこと。

え 「国内の商工業を発展させる」と「海外貿易の拡大」がヒント。クロムウェルの商工業政策は議会制重商主義に基づいている。

お 当時のイギリスは海洋国家として、中継貿易で活躍するオランダと霸権を争っていた。オランダに打撃を与えるためにクロムウェル指導下の共和政政府が制定した航海法（1651）をきっかけに、翌52年から3回にわたる英蘭戦争（イギリス＝オランダ戦争；1652～54, 65～67, 72～74）が始まる。この戦争でオランダに勝利したイギリスは、オランダの海上霸権を奪う。その後、18世紀にはイギリスは新大陸とインドにおける霸権をフランスと争うことになるが、これにもイギリスは勝利する。

か・き チャールズ2世の專制政治に対する議会の抵抗として、この2つは最重要項目である。しっかりとその内容まで確認しておくこと。

く・け トーリとホイッグが、すでにチャールズ2世の治世下で誕生していたことは意外に盲点となりやすい。両者の支持層、主張をそれぞれ整理しておこう。

こ 1689年はイギリスにとって、1688年と同様に実り多い年であった。1689年2月に議会は「権利の宣言」をオラニエ公ウィレムとメアリに提出し、これを認めた上で、2人はイギリス国王ウィリアム3世（位1689～1702）とメアリ2世（位1689～94）として共同統治を開始した。この「権利の宣言」が「権利の章典」として法文化されたのは、同年末の12月である。

【4】

解答

問1 ア h イ n ウ j エ c 問2 d 問3 d 問4 c

問5 b 問6 c 問7 c 問8 a

解説

17世紀を「危機の時代」と見る考え方をまず冒頭で述べた上で、17世紀の西ヨーロッパの主要三国、イギリス、フランス、ドイツ各国の動きについて多く基本的な事項を問うている。最近は16世紀=好況の時代、17世紀=危機の時代という考え方から入試問題を作成する大学も数多く見られるので、こうした切り口のテーマにも慣れておいたほうがよい。

問1 ア 三十年戦争（1618～48）は、ペーメン王でのちの神聖ローマ皇帝フェルディナント2世の旧教的圧政に対し、ペーメンの新教徒が反乱を起こしたのが契機であったから、ペーメンが正解となる。宗教戦争として始まった三十年戦争は、旧教側のハプスブルク家に対抗するために、同じ旧教国のフランスが新教側として参戦するにあたって、政治的性格を強めることになった。

イ 議会が権利の請願を提出したのが1628年、チャールズ1世が議会を閉鎖したのが翌年の1629年である。スコットランドの反乱が起きたのが1639年で、王が戦費調達のために議会を開いたのが、問題文に「1639年にスコットランドで反乱が起きると、翌年、～議会を開いたが」とある部分なので、1640年となる。この間、11年間である。この設問では問題文にかなりヒントが含まれているので、しっかりと活用すること。

ウ 基本的問題。選択肢を見ても女性の名前は「アン」「カザリン」「メアリ」しかないので選べるはずである。カザリンは英語だとキャサリン、フランス語だとカトリーヌ、ロシア語だとエカチェリーナとなる。注意しよう。

エ オレンジ公（オラニエ公）はオランダの名家である。名誉革命を経てウィリアム3世（位1689～1702）に即位したオラニエ公ウィレムは、ルイ14世のオランダ侵略（オランダ侵略戦争；1672～78）に対抗するオランダ貴族らのリーダーだった。

問2 三十年戦争の講和条約はウェストファリア条約で、これは基本的な問題だが、この講和条約が締結された都市名を聞くこの設問は、やや珍しい出題パターンである。ウェストファリア地方のミュンスターとオスナブリュックという2都市で講和会議が開かれ、オスナブリュックで調印されている。

問3 フランスはウェストファリア条約で、ロレーヌ地方のメス・トゥール・ヴェルダンの3都市を、アルザスの大部分とともに獲得した。

問4 フロンドの乱（1648～53）当時、ルイ14世はまだ幼く、政治の実権を握っていたのは宰相マザランであった。乱の背景には、ルイ13世の宰相リシュリューが進めていた中央集権化に対する貴族・高等法院の官僚らの不満、三十年戦争で逼迫した財政を支える民衆の不満があった。フロンドの乱はパリで始まり全国に波及したので、この設問では、パリを解答として選べばよい。フロンドの乱の鎮圧後、フランスの中央集権化政策は着実に進展する。

問5 テューダー朝は、バラ戦争（1455～85）を終結させたヘンリ7世を開祖に1485年から始まり、エリザベス1世の死により1603年に断絶した。この間118年なので、選択肢から120年を選ぶのが正解となる。

問6 世界史の学習には地図が不可欠である。できれば歴史地図で位置を確認した後に、現代の地図も見ておくとよい。プリマスはボストン東南に位置する小都市であるが、このボストンはマサチューセッツ州の中心都市である。

問7 選択肢に挙がっている5人は、いずれも17世紀から18世紀の人物なので、時代を手掛かりに消去法を用いることはできない。ピューリタン革命は1642～49年、王政復古が1660年、名誉革命が1688～89年である。スウィフト（1667～1745）は、『ガリヴァー旅行記』で有名な作家。デフォー（1660～1731）はジャーナリストにして作家であり、代表作に『ロビンソン＝クルーソー』がある。この2人は、ピューリタン革命時にはまだ誕生しておらず、王政復古期に子供時代を過ごした。バンヤン（1628～88）とミルトン（1608

～74) はピューリタン作家として有名で、代表作にはそれぞれ『天路歴程』、『失樂園』がある。このうち、バンヤンはピューリタン革命時に議会軍に従軍したが、王政復古後には12年もの間（短期投獄も含め）投獄されているので、バンヤンがこの設問での正解となる。ミルトンはクロムウェル政府のラテン語秘書官を務めたが、そのため後に全財産を没収されている。啓蒙思想家として名高いロック（1632～1704）は名誉革命のうちに『統治二論（市民政府二論）』を出版し、自然権思想と社会契約論に立脚して王権神授説を批判している。

問8 意表をついた問題。マザランはイタリア出身で、イタリア名は Giulio G .Mazarini という。ローマ教皇に軍人として仕えたのち外交官となり、教皇特使としてフランスに滞在している間にリシュリューに認められ、フランスに帰化した。1641年にはローマ教会の枢機卿となり、43年にルイ14世が5歳で即位すると、その宰相としてリシュリューの政策を引き継いだ。フロンドの乱の最中にルイ14世は国王成人年齢の13歳に達したが、マザランが亡くなる1661年まで親政を行わなかった。

【5】

解答

- ① C ② D ③ A ④ D ⑤ D ⑥ C ⑦ A ⑧ B
⑨ D ⑩ C

解説

基本的な自然科学史。④は世界史の範疇ではない。自然科学は同じジャンル（天文学・医学・動植物学・化学など）で時代を超えた整理が必要である。暗記項目も多いが、覚えているだけで得点できる貴重なジャンルでもあるので、地道に対策を行うこと。

- ① 自然観とあるからアリストテレス。アリストテレスは“万学の祖”と呼ばれ、その業績は広範であり、後世への影響はプラトンと並んで甚大である。学問の全分野で今日まで用いられる術語・概念・方法の多くがアリストテレスに発するといわれる。Dのプロティノス（205頃～269）はエジプトの出身でローマの軍人皇帝時代の人物。プラトンの哲学体系を基礎に、オリエントの神秘思想を加味して形成された新プラトン主義を確立した。アウグスティヌスなどを通じて、中世キリスト教神学に影響を与えた。
- ② コペルニクス（1473～1543）はヤゲウォ朝（1386～1572）時代のポーランドの天文学者。クラクフ大学で学んだ。地動説を説き、古代ローマのプトレマイオス以来の天動説を転換した『天球回転論』（1543）を著した。Aのプトレマイオスは、五賢帝時代にアレクサンドリアで活躍した天文学・数学者。主著『天文学大全（アルマゲスト）』は地球中心説（天動説）に基づく天文学の理論書で、コペルニクス以前のヨーロッパ、イスラーム世界の天文学の中心となった。
- ③ ピサ出身のガリレオ＝ガリレイ（1564～1642）は天体望遠鏡で木星の衛星を発見して地動説を支持したほか、振り子の等時性、物体落下の法則を発見した。主著は『天文対話』など。Bのケプラー（1571～1630）はドイツの天文学者。惑星運行の3法則を発見し、地動説の数理的証明を完成した。Cのマクスウェル（1831～79）はイギリスの物理学者。1864年にファラデーの研究を数式化し、「マクスウェルの方程式」を基礎とする電磁気学理論体

系を導出した。Dのラプラース（1749～1827）はフランスの數学者・天文学者。太陽系の研究を行い、宇宙進化論を説いた。

- ④ 受験の世界史を超えた問題（但し、物理を学んだ人には簡単）。
- ⑤ ニュートンについては、万有引力だけではなく主著『プリンピキア』まで必ず押さえておくこと。トレマイオスの『天文学大全』、ダーウィンの『種の起源』も同じく業績とともに覚えておくべき著作。Aの『百科全書』はディドロ（1713～84）とその友人ダランベール（1717～83）が責任編集者として、100余名の総執筆者をまとめていった。しかし、その著作内でキリスト教批判を行ったため、教会から弾圧されて撤退した。Bのスピノザ（1632～77）は『倫理学（エチカ）』で汎神論を主張した。Cについては③を参照。
- ⑥ アインシュタイン（1879～1955）は古典的なニュートン力学に大きな変革をもたらした相対性理論を完成させ、ノーベル物理学賞を受賞した（1921）。ユダヤ系ドイツ人であったため、ナチスの政権獲得とともにドイツを追放され、アメリカに亡命。ナチスが核分裂を軍事的に利用する危険性があるとフランクリン＝ローズヴェルト大統領（任1933～45）に伝えた。しかしそれは一方で、合衆国の原爆製造計画を推進する端緒となってしまった。そうした苦い経験から、第二次世界大戦後は核兵器廃絶のために奔走した。ラッセル＝アインシュタイン宣言（1955）は、彼の没後パグウォッシュ会議（1957）にて結実し、その後の反核運動に大きく影響した。Aの量子力学の分野ではフェルミ（1901～54）が著名。ムッソリーニ政権による圧迫を逃れ、1938年にアメリカに亡命。中性子研究を通じて合衆国の原爆製造計画に大きく関与した。Bの単子論を主張したライプニッツ（1646～1716）は、『単子（モナド）論』で神の定めた“予定調和”を唱えた。Dのエネルギー保存の法則を提唱したのは、マイヤー（1814～78）、ヘルムホルツ（1821～94）である（1847）。
- ⑦ デカルトは、“われ思う、ゆえにわれあり”を確認し、哲学的考察の基礎とした『方法叙説』（1637）を著した。
- ⑧ “われ思う、ゆえにわれあり”から考えること。
- ⑨ ファラデー（1791～1867）は電気理論を研究し、電磁誘導現象や電気分解の法則（ファラデーの法則）を発見した。Aの細菌学では、コッホ（1843～1910）とパストゥール（1822～95）を押さえておこう。コッホは結核菌（1882）・コレラ菌（1883）を発見したほか、ツベルクリンを作った（1890）。パストゥールは狂犬病対策のためにワクチン療法を初めて試みる（1885）など、微生物学の基礎を築いた。Cの博物学は、古代ローマのプリニウス（23～79）が祖で、帝政初期の軍人でもあった。『博物誌』を著したが、ウェスヴィウス（ヴェスヴィオ）火山の噴火で殉職した。
- ⑩ リービヒ（1803～73）は有機化学の基礎を確立した。Aのラヴォワジエ（1743～94）は、化学反応の前後において物質の全質量は変わらないという質量保存の法則を発見（1774）し、燃焼理論を確立した。彼はフランス革命中、徴税請負人の前歴からジャコバン政権により死刑にされた。Bのリンネ（1707～78）は植物分類学を創始し、初めて学名を考案した。Dについては⑥を参照。

【6】

解答

1 d 2 b 3 e 4 f 5 g 6 b 7 d 8 a
9 e 10 c 11 d 12 b 13 c 14 b 15 c 16 a
17 d 18 e 19 a 20 g 21 f 22 e 23 c 24 d
25 b

解説

ルネサンス期から18世紀までのヨーロッパ文化史をまとめた問題。問われている事項はどれも標準的なものであり、しかも選択方式だから、8割程度の正答率はめざしたいところだ。誤ったところはしっかりと確認しておくこと。

- 1 13世紀の修道院の創立者といえば、フランチェスコ派の開祖フランチェスコと、ドミニコ派の開祖ドミニコが頭に浮かぶであろう。この場合、「アッシジ」の聖者ということでフランチェスコが正解となる。
- 2 「トスカナ方言でみごとに表現する『神曲』」からダンテが正解となる。このトスカナ方言が現代イタリア語のもととなっている。
- 3 「人文主義の叙情詩人」を受験世界史の知識から選ぶとなると、eのペトラルカが正解となる。ちなみに選択肢aのタッソ（1544～95）はイタリアの叙事詩人で、イタリアの名門フェラーラのエステ家に一時仕えた人物である。
- 4 『デカメロン』は近代小説の先駆けといわれている。
- 5 マキャヴェリはフィレンツェ共和国の政府書記官として活躍したが、1512年にメディチ家の復権でその職を追われ、書記官時代の経験を活かして『君主論』を著した。
- 6 エラスムスはネーデルラント（オランダ）出身の人文主義者である。「エラスムスの生んだ卵をルターが孵した」といわれるよう、エラスムスの著書『愚神礼讃』は痴愚の女神の口を借りるという形でローマ教会を批判しているが、これを現実に宗教改革という形でローマ教会と訣別し、新派を結成したのがルターである。しかし、エラスムスはあくまで人文主義者という立場からローマ教会を批判したのであり、宗教改革に際してはルターには与せず、中立の立場を貫いた。
- 7 やや難。ロイヒリン（1455～1522）はドイツの人文学者で、ヘブライ語の研究で有名である。これとともに、ギリシア語研究で有名なメランヒトンがルターを支持したこと覚えておこう。
- 8 チョーサーはイギリスの人文学者。書名にある「カンタベリ」がイギリスの大司教座都市であることからも類推できるだろう。また問題文から、この国がトマス＝モアの故国であることも読み取れる。大法官だったトマス＝モアはヘンリ8世の離婚に反対して処刑された人物であり、ここからもイギリスを選ぶことができる。
- 9 ラブレーとモンテーニュはフランスの出身である。14世紀にイタリアで生まれたルネサンスが、各国で波及していく経過を具体的に、人名と作品名でチェックしておく必要がある。
- 10 セルバンテスはスペインの人。彼はレバントの海戦（1571）に従軍した時に左手を失っており、こちらの切り口から出題されることも多い。

- 11～13 それぞれ時代と国名を手掛かりにすれば答えられるだろう。地動説の流れはしっかりと押さえておくこと。
- 14～18 イギリスのフランシス＝ペーコンによる帰納法とイギリス経験論の確立、フランスのデカルトによる演繹法と大陸合理論の確立、そして両者を総合したドイツのカントによる批判哲学の確立、という流れをしっかり理解しておこう。
- 19・20 ルイ14世時代のフランス文学については、この3者を中心に整理しておくこと。
- 21・22 21は『失楽園』の作者ということでミルトンが、22は『天路歴程』の作者ということでバンヤンがそれぞれ正解となる。この2人のピューリタン作家とその作品はよく間わるので注意が必要である。両者を混同しないこと。
- 23 『ガリヴァー旅行記』の作者スウェィフトと混同しないこと。『ロビンソン＝クルーソー』の作者はデフォーである。
- 24 「繊細優美」な18世紀の美術様式といえばロココ式である。西欧文化の美術様式としては、中世からの「ロマネスク式」→「ゴシック式」→「ルネサンス式」→「バロック式」→「ロココ式」という一連の流れとそれぞれの特徴、そして代表的な建築・美術作品について、図版を紐解きながらもう一度確認しておきたい。またこれらの美術様式が誕生してきたその社会的背景にも注意する必要がある。文化というものは、その当時の社会情勢と経済的状況の反映なくして誕生するものではないからである。
- 25 バッハやヘンデルが属する音楽の様式はバロックである。

【7】

解答

1 ニ 2 チ 3 イ 4 ロ 5 ト 6 チ 7 ワ 8 カ
9 ヨ 10 ハ 11 ル 12 ヲ 13 ワ 14 ヘ 15 ヌ

解説

設問は基本的なので、全問正解が望ましい、関係する内容を解説するので、学習の参考にして欲しい。

1・2 教父エウセビオス（260頃～339）が唱えた皇帝を神々の代理人とする神寵帝理念は、ビザンツ帝国の皇帝教皇主義や王権神授説に影響を与えた。王権神授説を唱えた思想家としてはフィルマー（1589～1653）とボシュエ（1627～1704）を押さえておきたい。フィルマーはピューリタン革命前後に、聖書に基づき王権（チャールズ1世；位1625～49）の絶対性を主張した。ボシュエはルイ14世（位1643～1715）に仕え、フランス＝カトリック教会の教皇権からの独立を説いたガリカニスムの論客でもある。

3・4 グロティウス（1583～1645）の名があり、社会契約説に影響することから自然法と考える。グロティウスは“国際法の父”や“近代自然法の父”と称される。『海洋自由論』（1609）ではポルトガルによるインド航路独占を批判し、『戦争と平和の法』（1625）では三十年戦争の惨禍を受けて国際法規の必要性を論じ、国際法学の基礎を築いた。

他に、フランスのサン＝ピエール（1658～1743）はスペイン継承戦争（1701～13）後、『永久平和草案』において「諸国民の最高法廷」の設置による平和維持を主張し、カントやルソー

に影響を与えた。

5～7　社会契約説の思想家霍布ズ（1588～1679）は、『リヴァイアサン』（1651）で自然状態は“万人の万人に対する闘争”であるとし、その状態を回避するために国民は政府に自然権を移譲したのだから、絶対服従しなければならないとして、結果的に絶対王政を支持し、1660年のチャールズ2世の王政復古を賞賛した。ロック（1632～1704）は『統治二論（市民政府二論）』（1690）で国民は政府に自らの同意に基づき自然権の一部を委託したに過ぎないとし、政府が契約違反を犯したときの国民の抵抗権（革命権）を肯定し、1688～89年の名誉革命を支持した。革命権を肯定したことで合衆国の独立やフランス啓蒙思想の発展に大きな影響を与えた。

8～10　18世紀後半にフランスで発展した啓蒙思想は、人間理性に絶対の信頼を置き、非合理的な社会制度・慣習・権威を否定し、アンシャン=レジームを批判したため、フランス革命の指導理念となった。18世紀は“啓蒙の世紀”と呼ばれる。以下に啓蒙思想家とその考え方、代表的著書を紹介しておくので、この機会に覚えておこう。

モンtesキュー（1689～1755）

『ペルシア人の手紙』（1721）でフランスを旅行中のペルシア人が見聞を故国に書き送るという形式で、当時のフランスの政治や社会を風刺した。また、『法の精神』（1748）で法の精神を東西の歴史の中から考え、三権分立を主張し、アメリカ合衆国憲法やその他の近代的憲法に多大の影響を与えた。

ヴォルテール（1694～1778）

プロイセン王フリードリヒ2世（位1740～86）の招きに応じてサン=スーシ宮殿に滞在し、ロシアのエカチェリーナ2世（位1762～96）とも文通するなど、啓蒙専制君主から一般の市民まで大きな影響力を持ち、18世紀は“ヴォルテールの世紀”とも呼ばれる。『哲学書簡（イギリスだより）』（1734）はイギリスの立憲政治を礼賛して、当時のフランスの政治・社会・文化を厳しく批判した。

ルソー（1712～78）

『人間不平等起源論』（1755）において、自然状態では万人は平等であったが、私有財産の存在により貧富の差が生じ、支配者と被支配者に分化していくとしたとして、当時の社会を批判した。『新エロイーズ』（1761）は書簡の形式をとり、貴族の令嬢と平民の家庭教師の恋愛を描いてベストセラーとなり、ロマン主義文学にも影響を与えた。『社会契約論』（1762）は市民相互の平等な社会契約により国家が組織されると考え、国家の主権は人民に帰属する（人民主権）と主張し、ロベスピエールなどフランス革命の指導者たちに大きな影響を与えた。『エミール』（1762）は小説の形式を採った教育論。その宗教観が原因で禁書とされ、フランスから追放・迫害された。『告白録』（1782～89）は『エミール』発刊後に追放・迫害に遭った時期に、自己の一生を回顧して執筆。没後に出版され、のちの文学に大きな影響を及ぼした。“自然に帰れ”と、自然状態への回帰による人間性の回復を主張した。

ディドロ（1713～84）

『百科全書』（1751～72）の編集責任者となり、その序文を著す。一方で種々の文学作品を執筆した。晩年にはエカチェリーナ2世の厚遇を受け、ロシアへ旅行した。

ダランペール (1717～83)

数学者として有名となり、フリードリヒ2世と親交し、『百科全書』の編集（数学・哲学）に協力したが、弾圧されて撤退した。

レッシング (1729～81)

ドイツの劇作家・演劇評論家。カントと並ぶドイツの啓蒙思想家で『賢者ナーラン』を著した。

11～13 重商主義に対し、重農主義は“なすにまかせよ（レッセ＝フェール）”と自由放任を主張、富の源泉を農業と考え、当時の重商主義に基づく種々の規制に反対した。以下にこのテーマを代表する人物を挙げる。

ケネー (1694～1774)

『経済表』(1758) を著し、資本主義的大農園経営によるフランス経済再建を説いた。その弟子テュルゴー (1727～81) はルイ16世(位1774～92)の財務長官として、財政再建に努力した。

アダム＝スミス (1723～90)

『諸国民の富（国富論）』(1776) で資本主義社会を初めて体系的に分析し、重商主義の経済統制に反対して自由放任主義を主張した。古典派経済学を創始した。

マルサス (1766～1834)

『人口論』(1798) で、人口増加は幾何級数的であるのに、農業生産に依存する食料は算術級数的にしか増加しないと主張し、労働者階級の貧困や悪徳は不可避であるとした。その後、リカードやミルへと受け継がれた。

14・15 リンネ (1707～78) はスウェーデンの植物学者で分類学を確立した。ジェンナー(1749～1823) はイギリスの医師で、種痘法を確立し (1796)、天然痘の予防に貢献した。

W3M
早慶大世界史



会員番号

氏名